

## 今週の為替相場見通し(2022年12月19日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		134.53 ~ 138.18	136.73	135.00 ~ 139.00
ユーロ	(ドル)		1.0507 ~ 1.0737	1.0584	1.0300 ~ 1.0650
(1ユーロ=)	(円)		143.50 ~ 146.65	144.66	143.00 ~ 147.50
英ポンド	(ドル)		1.2122 ~ 1.2446	1.2140	1.2000 ~ 1.2400
(1英ポンド=)	(円)	*	165.75 ~ 169.28	166.14	164.00 ~ 169.00
豪ドル	(ドル)		0.6676 ~ 0.6893	0.6686	0.6650 ~ 0.6900
(1豪ドル=)	(円)	*	91.22 ~ 93.36	91.33	90.00 ~ 93.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、\*印の項目はブルームバーグ。

## 1. 米ドル

金融市場部 グローバルFIチーム 大橋 開

(1)今週の予想レンジ: 135.00 ~ 139.00 円

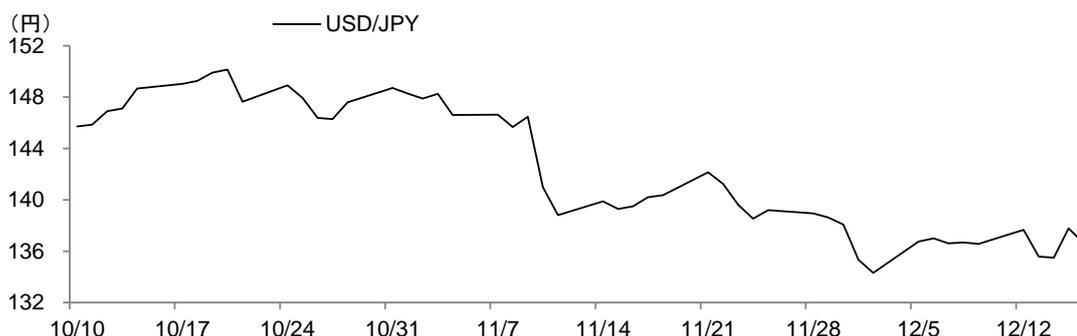
## (2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は、各国中央銀行会合・主要経済指標の発表に伴い乱高下したものの、週初とほぼ同じ水準で越週した。日中の値動きをより詳しく振り返ると、まず12日は、136.76円でオープン。週内に重要イベントを控え様子見ムードが強まり136円台後半でのレンジ推移。海外時間では、米債10年入札が低調な結果となり、米長期金利上昇に伴い、一時137円台後半まで上昇。13日は、米11月消費者物価指数(CPI)を控えしばらくは方向感のない推移。予想対比較調な米11月CPIを受けてドル全面安となり、ドル/円も急落。株高ドル安の流れが強まる中、一時134.67円まで下落したものの、引けにかけてやや値を戻す。14日は、FOMCを控え日中は小動きとなったが、海外時間に入り日銀のヘッドラインで一時週安値の134.53円まで下落。その後、FOMCを挟み上下したものの、結局は135円台まで戻す。15日は、138円台まで上昇する展開。ECB政策理事会を受けたユーロ買いの動きにドル/円が軟化する場面も見られたが、クロス/円の堅調推移に加え、米株が軟調になるなどリスクオフからドル買いが強まると週高値の138.18円をつける。16日は、FRBの積極的な金融引き締めが米国の景気悪化を招くとの思惑が燻っていたものの来週に日銀金融政策決定会合を控えポジション調整も入ったためか円買いで反応し、136円台半ばまで下落。引けにかけては小幅戻し、136.73円で越週した。

今週のドル/円相場は、底堅い展開を予想する。その背景として、米金利の上昇余地が残存している点が指摘される。先週末にNY連銀ウィリアムズ総裁やSF連銀デーリー総裁からタカ派発言が相次ぐ中、株は金利敏感株中心に売りで反応する一方、市場が予想する2023年末FF金利は4.30%近辺まで低下(FRBの2023年末政策金利見通しは5.125%)。利上げ折り込みの巻き戻しが可能な水準であり、更にタカ派スタンスを示してくるリスクが挙げられ、突発的なFRB高官のタカ派発言には要警戒。加えて、米独スプレッドの調整余地が挙げられる。先週各国の主要中央銀行会合を経て、米独10年スプレッドは約132bpまで縮小(2020年10月以来)。ECB政策理事会にて、ラガルドECB総裁より”米国に比べ長期な軌道になる”などタカ派発言が確認されており、更なる金利上昇には警戒する必要がある。一方で、今後のECBの明確なスタンスを予想する上では、欧州のインフレがどの程度粘着性があるのか確認する必要があるとあり、年内に欧州の主要経済指標発表を控えていないことや独10年債は今月の金利の下限から足許までで約40bp上昇するなど投資妙味が増していること等から、短期的な欧州債買い戻しの動きが入りやすいことも押さえておきたい。

## (3)先週までの相場の推移

先週(12/12~12/16)の値動き: 安値 134.53 円 高値 138.18 円 終値 136.73 円



(資料)ブルームバーグ

## 2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 小野崎 順基

(1) 今週の予想レンジ: 1.0300 ~ 1.0650 143.00 ~ 147.50 円

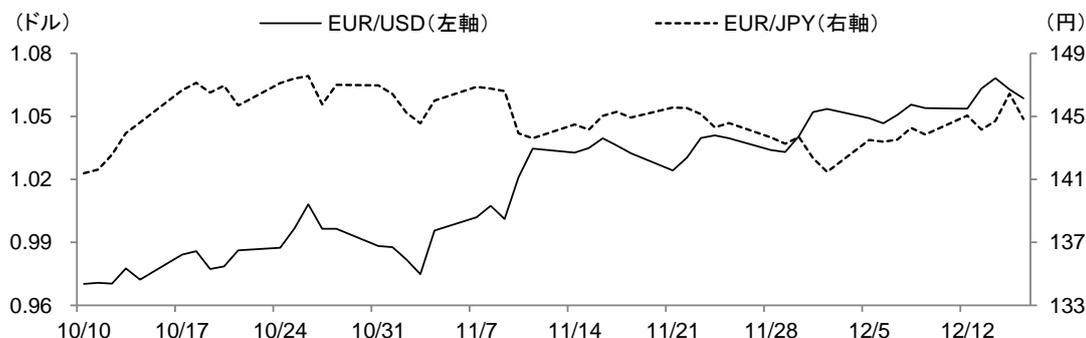
### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週前半に急騰もその後は伸びを欠いた。週初12日、1.0521でオープンしたユーロ/ドルは、ドル買い相場の中で一時週安値となる1.0507まで下落も、ロンドン・NY時間には欧米金利差の動向に振られつつ1.0540を挟んだレンジ推移となった。13日は動意薄な展開の後、米11月消費者物価指数の弱い結果を受け、米金利急低下とともに一時1.06台後半まで上昇した。14日にはFOMCを控え動意薄の展開。FOMC後にはドルが買われる場面もあったがドルの戻り売りに押され1.06台後半まで上昇。15日はドル買い相場の中、じりじりと下落。しかし、ECB政策理事会でインフレ見通しが引き上げられ、ラガルド総裁がインフレへの強い警戒感を示したことやECBの今後の利上げ観測の高まりから、約半年ぶりの水準となる1.0737まで急騰した。その後はリスクオフのドル買いが強まり1.06台に下落となった。16日は前日のECB政策理事会における積極的な金融引き締め姿勢が長期化するとの見方にユーロ圏の景気悪化懸念からユーロ売りが目立つ流れになり、1.0584で越週した。

今週のユーロ/ドル相場は上値の重い展開を予想する。先週のECB政策理事会では各種政策金利が+50bp引き上げられるとともに、今後の追加利上げも示唆される内容。ユーロ圏では物価上昇と景気減速によるスタグフレーション、そしてリセッションに陥りつつあるとの警戒感もあることから積極的なユーロ買いとはなり難いか。また、ロシアによるウクライナでの戦術核使用の可能性やロシア産原油への上限価格設定に対する報復措置などにも注目が必要になる。経済指標では、19日(月)の独12月IFO企業景況感指数に注目となる。尚、対円という点では19(月)~20日(火)に開催される日銀金融政策決定会合での内容にも注目。金融緩和政策は継続が予想されるが「日銀は来年4月に発足する新体制下での金融政策の点検や検証を実施する可能性がある」と報じられたこともあり黒田日銀総裁の定例会見での発言に注目する必要があるか。

### (3) 先週までの相場の推移

先週(12/12~12/16)の値動き: (対ドル) 安値 1.0507 高値 1.0737 終値 1.0584  
(対円) 安値 143.50 高値 146.65 終値 144.66



(資料)ブルームバーグ

### 3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.2000 ~ 1.2400 164.00 ~ 169.00 円

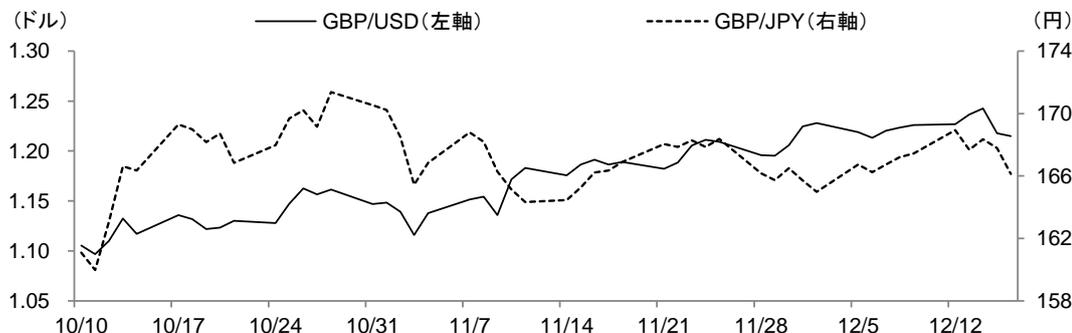
#### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は若干の下落。週初12日は、対ドルで1.22台前半で始まる。あまり方向感の出ない展開が続く中、13日に米11月消費者物価指数(CPI)が予想比下振れしドル売りとなると1.24台まで上昇。14日はFOMCを待つ中で前日レンジ内でのみみ合いが続く。FOMCの結果を受け、一時1.23台半ばへ押されるも程なく1.24台を回復した。翌15日はFOMCのタカ派的な結果を消化しながらドル買いで始まる。正午にBOEが政策金利を予想通り3.50%へ+50bp利上げをするとポンド売りが強まり1.21台半ばへ下落。16日もポンド安が継続し1.21台前半まで下落する場面もあった。一方で対円では、週初12日に167円台前半で始まるが、米国時間にはドル/円上昇につれて169円台まで上昇。13日は米11月CPI発表後にドル/円の下落につれて167円前半まで下げる。14日のFOMC後のドル/円上昇につれて15日には168円台後半を回復。16日はポンド下落を受け一時166円台まで下げた。

今週の英ポンド相場は、上値重い推移継続を見込む。欧州勢がクリスマス休暇に向かい活発な取引は出にくくなるため基本的には大きな変動は予期せずに今週のトレンドが続くものとみる。ややハト派的とみなされたBOEではあるが、金利先物市場では23年中に4.60%レベルへの利上げを織り込んでいる(弊行ロンドン支店シニアエコノミストのアッシャーによるとBOEは次回2月会合でさらに+50bp利上げをする見通しは変わらずとのこと)。それまでは経済指標を睨んでの憶測がポンドを振らせることになる。FOMCで盛り返した形のドルであるが、その前日の米11月CPI下振れで下落していた分を戻しただけにすぎず、市場はまだ完全にドルに強気となり切れているわけではない。今週の米経済指標で相場が動くこともあるかもしれないことに留意。また英国と欧州では厳冬が続いておりエネルギーのひっ迫が顕在化することなどでポンドやユーロに下落圧力がかかりやすいこともリスク要因のひとつか。

#### (3) 先週までの相場の推移

先週(12/12~12/16)の値動き: (対ドル) 安値 1.2122 高値 1.2446 終値 1.2140  
(対円) 安値 165.75 高値 169.28 終値 166.14



(資料)ブルームバーグ

#### 4. 豪ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 松木 悠馬

(1) 今週の予想レンジ: 0.6650 ~ 0.6900 90.00 ~ 93.00 円

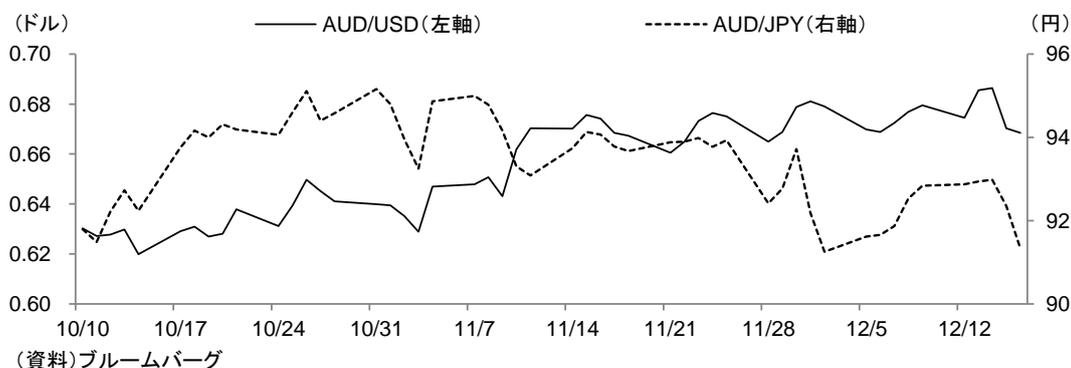
##### (2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は米11月消費者物価指数(CPI)後に上昇も、その後は米中経済指標の結果が弱含んだことを背景に下落する展開。週初12日は0.6778でオープン。米金利が上昇する流れにドル買いが優勢となり0.6729を付けた。13日は0.6752でオープン。発表された米11月CPIではヘッドライン・コアどちらも前月および市場予想を下回る結果となり、インフレピークアウトを示唆した。この結果を受け、FRBの利上げペース減速への期待が強まると、米金利低下とともにドル売り優勢となり豪ドルは一時0.6893まで急騰したが、小幅に売り戻されて0.6850近辺で引けた。14日、注目のFOMCでは市場予想通り+50bp利上げを決定。発表直後に豪ドルは0.6812近辺まで下落も、すぐに買い戻され、往ってこいとなった。15日、豪ドルは0.6860近辺でオープン。豪11月雇用統計は市場予想を上回る結果となるも豪ドルへの影響は限定的となった。その後、中国11月小売上高等の指標が市場予想を下振れる結果となり、人民元が弱含むと豪ドルも連れ安となった。加えて、米11月小売上高等の経済指標が軒並み市場予想を下振れる結果となるとリスク資産が下落し、リスクオフのドル買いが強まり豪ドルは0.6677まで下落。終盤には小幅に戻し0.6700でクローズ。16日、豪12月製造業/サービス業PMIが僅かに悪化したことや、FRB高官によるタカ派発言が嫌気され米株が続落も豪ドル相場への影響は限定的となり、値動きの乏しい推移となると0.6686で越週した。

今週の豪ドルは底堅く推移すると予想する。先週の豪ドル相場は米11月CPIや先進国の中銀イベントに左右される展開となった。今週は注目の米経済指標の発表が一巡し、クリスマス休暇を迎え流動性が下がる中、中国のゼロコロナ政策の修正に関するヘッドラインに注目したい。段階的な政策修正は、中国国内やその他周辺国での景気回復への期待から、人民元相場の上昇とともに豪ドルも底堅く推移すると予想する。ただ、米国を中心に発表される経済指標の結果が弱含む場合や中国国内の経済活動へ戻りの動きが弱い場合には、スタグフレーション懸念の強まりによるリスク資産の下落・リスクオフのドル買いが強まる可能性があり、下落リスクには警戒したい。また、対円での豪ドル相場については、19日(月)~20日(火)に予定されている日銀の金融政策決定会合では緩和継続が基本線となり、12月RBA会合にて+25bp利上げを継続している豪ドルとの金融政策の違いがサポート材料となり、上昇圧力は高まると予想する。

##### (3) 先週までの相場の推移

先週(12/12~12/16)の値動き: (対ドル) 安値 0.6676 高値 0.6893 終値 0.6686  
(対円) 安値 91.22 高値 93.36 終値 91.33



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。